

発 達

発達とは、胎児期から新生児期、乳児期、幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期を経て死に至るまでの成熟や衰退を含めた過程の変化といえます。発達には、遺伝的要因と環境からの影響、その時代や国の社会的・文化的影響、その社会での求められる役割によっても影響を受けます。

一般的な生涯における心身の発達

胎児期（受精から出生まで）：受胎20週頃から蝸牛により外界の音を認識可能になります。

新生児期（出生後28日を経過しない乳児）：呼吸、摂食、消化、呼吸を自力で行います。

乳児期（0歳から1歳半頃）：愛着を形成し、人との基本的信頼感を築きます。

幼児期（1歳半から小学校入学まで）：言葉の習得と基本的生活習慣を身につけ、自己制御機能も向上します。

児童期（小学校の時期）：言語的・情緒的に養育者に保護されているが、社会的関係を広げ、社会的スキルを身につけます。

青年期（中学生から20代後半頃まで）：第2次性徴に入り、身体的な急激な変化により心理的にも不安定になります。その後、就職・結婚といった社会的成熟の時期をさします。

成人期（20代後半から老年期初期まで）：職業生活の充実、育児や子どもの独立、退職などライフイベントがさまざまに変化し、人生の折り返し地点に直面します。

老年期：社会での役割喪失や配偶者、近親者との死別などを経験します。老いや死に直面し自己の人生への受容し、人格の統合などがなされていく時期です。

ピアジェの認知発達理論

発達の研究の中で、健常な子どもの認知・知的な発達の現象を統合的に扱っている代表的なものとしてピアジェの認知発達理論があります。

キーワード

- 愛着（アタッチメント）
- ピアジェの認知発達理論
- ヴィゴツキーの発達の最近接領域
- エリクソンのライフサイクル理論

ピアジェの認知発達理論では、感覚運動期（0～2歳）：対象の認知をもっぱら感覚と運動を通じて行います。前操作期（2～7歳）：行為が内面化し、「ごっこ遊び」のような象徴作用が現れます。思考は自己中心性です。具体的操作期（7～12歳）：物の保存も成立し、可逆的操作も行え、具体的な推理や論理的思考も可能になってきます。自己中心性からも脱してきます。形式的操作期（12～13,4歳）：思考は、具体的・現実に束縛されることなく、形式的・抽象的思考が行えるようになります。

ヴィゴツキーの発達の最近接領域

ピアジェの認知発達理論に対し、ヴィゴツキーは子どもの認知・知的発達の水準を2つに分けて考えることを提唱していました。1つは自力で問題解決できる個人の発達水準であり、もう1つは、他者からの援助や協同によって達成が可能になる水準です。彼は、この2つの水準のずれの範囲を発達の最近接領域と呼びました。教育は、発達の最近接領域に適合したものが必要であり、またそうした潜在的な可能性の領域をつくり出すものでなければならないとしました。

エリクソンのライフサイクル理論

人の発達は上昇・成長し、下降・衰退するだけでなく、その後もさまざまな機能が環境との相互作用の中で成熟し、生涯をかけて発達し続けると考える生涯発達の考えがあります。その代表的なものがエリクソンのライフサイクル理論です。

エリクソンは、人間の心理的障害が幼児期の問題の未解決をきっかけにしているだけでなく、同時にその年齢に要求される社会的問題を解決することができないところからも生じるとし、それぞれの発達段階の危機についても述べています。それは、基本的信頼対基本的不信（乳児期）・自律性対恥と疑惑（幼児期初期）・自主性対罪悪感（遊戯期）・勤勉対劣等感（学童期）・同一性対同一性の混乱（青年期）・親密性対孤立（前成人期）・生殖性対停滞期（成人期）・統合対絶望（老年期）が挙げられます。これらの危機とは全発達に連続して覆うわけではなく、次のステップにいく際に解決を余儀なくされる分岐的な状態を表しているといわれています。それぞれの発達課題を達成できなかった場合に心理社会的に望ましくない状態に陥るとされています。

まとめ

- 発達とは、本人の生まれもった気質に加え、遺伝、身体的、精神的、家族、社会、対人関係などその人の取り巻く環境の相互作用によって獲得されていく。
- 発達研究は、共通の発達の原則を求める立場や時期ごとの特徴を求める立場などがあり、それぞれの発達研究の観点を抑えておくことが必要。

<参考文献>

山内光哉編 2004 発達心理学（上）ナカニシヤ出版

平山論 / 鈴木隆雄編著 2005 発達心理学の基礎 I ミネルヴァ書房

巖島幸雄 / 羽生和紀編 2005 ベーシック心理学 啓明出版